
丹羽文雄参考書誌

——「丹羽文雄展」に関連して——

深井人詩

目次

- | | |
|----------|----------|
| 1 丹羽文雄展 | 2. 展示解説 |
| 1.1 業績 | 2.1 調査書誌 |
| 1.1.1 年譜 | 2.1.1 解題 |
| 1.1.2 著作 | 2.1.2 評論 |
| 1.2 展示会場 | 2.2 作品解説 |
| 2.2.1 戦前 | 2.2.1 全体 |
| 2.2.2 戦後 | 2.2.2 部分 |

3 参考書誌

- | | |
|-----------------|--------------|
| 鮎 (昭7) | 青麦 (昭28) |
| 海戦 (昭17) | 菩提樹 (昭30~31) |
| 厭がらせの年齢 (昭22) | 顔 (昭34~35) |
| 哭壁 (昭22) | 有情 (昭37) |
| 蛇と鳩 (昭27) | 一路 (昭37~41) |
| 遮断機 (昭27) | 親鸞 (昭40~44) |
| [付] 蓮如 (昭46~56) | |

まえがき 「一人の文学者に関する作家論や作品論をひと通り調べあげたい。文学史・文壇史上の位置や作品への評価がどうであったか、文学事典類からの知識よりももっと詳しく知りたい。専門家・研究家の意見の急所を読んでみたい」 図書館に対する学生からのこういう要望に応えるために、今回取り組んだ丹羽文雄展における資料調査の手順を一事例として報告する。展示会準備期間一箇月という制約



早稲田大学在学当時の丹羽氏

のなかで果し得なかった作品解説のための3「参考書誌」作成は展覧会后に継続してまとめたものである。

1 丹羽文雄展 昭和62年2月大学の評議員会で、第3回早稲田大学芸術功労者賞は、作家丹羽文雄氏に正式決定した。図書館ではこれを記念し、展覧会を開催した。この種の展覧会への準備期間として、最も短かった1箇月後の、3月25日（卒業式中に丹羽氏への授賞と記念講演があった）と、4月1日（入学式）から4日までの5日間、会場は学内坪内博士記念演劇博物館

で、来観者は合計2,085人であった。

展示資料の目録は「丹羽文雄展」16頁に、丹羽文学理解のための主要作品紹介と抜粋は「新入生のために「丹羽文雄の作品から」12頁にまとめた。

展覧会報告は図書館発行の「ふみくら」第11号（昭62.6）に、準備日誌と裏方メモは「蕪」第69号（昭62.5）に掲載されている。

1.1 業績 展覧会準備に際して、今度の場合のように対象が人物となると、まず事典類による既存知識の再整理を行う。作家であれば当然文学事典であるが、最も事典類の量産されて来た分野だけに、記事の精粗、執筆者の経歴、刊行時期など、適切な判断による選択を行わねばならない。さらに鳥瞰的な業績把握のために、各種百科事典も比較参照する必要がある。

1.1.1 年譜 作家の個人年譜は著作と生活歴の両方が書きこまれていて、業績と生活を結びつけて考えるのには都合がよい。しかし生活歴や社会的活動を主に見通したい丹羽氏のような場合には、著作記入がかえって邪魔になる。氏のような曲折のある生活歴、戦後の旺盛な社会的活動のあった人物には著作記入のない年譜が作られてもよい。「丹羽文雄文学全集28」講談社（昭51）付載の「作品年譜」（小泉譲作成）は著作が上段、生活歴が下段と分けられてい見通しがよい。しかし社会的時代背景が摘録されすぎていて、丹羽氏個人の年譜記事がその影になり、個人記

事量も少ない。生誕の明治37年から昭和50年までであるが、現在のところ最も詳しいものである。比較検討すべき年譜としては「日本書誌の書誌 人物編Ⅰ」の3点、「人物書誌索引」の9点、最近のものでは「書誌年鑑 '85」にある河野多恵子編「丹羽文雄の短篇30選」付載の略年譜（清水邦行作成）がある。各種年譜を参照して展示目録には1頁の「略歴」を掲げた。

1.1.2 著作 著作目録として最も詳しいものは「年譜」のところであげた「丹羽文雄文学全集28」（昭51）付載のものである。この上段が作品年譜になっていて雑誌・新聞掲載作品目録である。特色は1点1点に原稿枚数が記載されていることである。単行書の「著者目録」も、その後が付録され「小説」の部と「隨筆・評論」に分けられている。ただし昭和50年までである。その後が作成されなければならない時に来ているといえよう。

古い著作目録としては「新日本文学全集18」改造社（昭15）にすでに単行本42点、新聞小説7点があげられている。

今回の展示目録には「同人雑誌」として「街」ほか掲載の10点、「主要著書」として小説149点隨筆・評論21点、選集・全集6点を記載した。

なお今回の展示に際して、丹羽家から借用した初版本ほか200余点は、図書館「稲門ライブラリー」に寄贈され、展覧会後の9月には、300余点の追加寄贈があった。

この誌面をかりて、寄贈のことを紹介させていただき、あわせて丹羽文雄氏に厚く感謝の意を表したい。

1.2 展示会場 本稿は丹羽文雄氏の業績を調査する手順と、作品解説のための資料「参考書誌」を提示するものであるが、参考までに展示そのものがどのようなものであったかを簡略に記しておこう。

会場には、卒業式・入学式の時期でもあり、卒業生・新入生と共にその父兄も参観し易い場所として演劇博物館一階の第1陳列室、第2陳列室が選ばれた。第1室は広く、脇廊下も使い、丹羽氏のみ部屋。ここはあとに詳しく述べる。第2室は真中に仕切りになる双壁が出ていて、奥を丹羽氏が私費を投じて後輩作家育成のために昭和24年から24年間刊行し続けた「文学者」254冊と輩出作家の代表作を、壁面パネルに後輩作家と丹羽氏の交歓写真を飾った。「文学者」から文壇に出た作家は、石川利光、辻亮一、富島健夫、山田智彦らの稲門作家のほか、瀬戸内晴美、河野多恵子、津村節子、竹西寛子らの女流も多い。手前の部屋に尾崎一雄、士郎、石川達三、火野葦平氏ら丹羽氏と交流のあった稲門作家の著作と写真パネル。尾崎一雄の著作は丹羽氏がよく出てくる「あの日この日」、尾崎士郎は「人生劇場」「早稲田大学」、石川達三は丹羽氏「海戦」などと関連する「生きている兵隊」、葦平は「糞尿譚」といった作品を展示。題して「同時代の早稲田作家と丹羽文雄」。

この第2室の一角にビデオセットを置き、大河内昭爾氏が作品背景を探訪する

「日本の名作 菩提樹」、NHK特集池内淳子共演の「丹羽文雄ショー」の二本を
 随時放映した。丹羽氏の風格を紹介して好評だったことを付記しておく。

1.2.1 戦前 演劇博物館第1陳列室は四角の部屋で、入口から対角線を引き左
 半分の二面の壁を戦前、右半分の二面を戦後と区分した。右隅の入口から左廻り
 に、第一壁面に取りつけのショーケース内は、処女出版「鮎」にはじまり「報道班
 員の手記」で終る戦前期40余冊の初版本。壁面には小学・中学・大学時代の丹羽氏
 の写真が、作文をその人にほめられて書くことが好きになったという中学の恩師、
 漢学者近藤奎の一軸を中央にして並ぶ。処女作以来作品に描かれ続けた生母との写
 真に続いて、本学学生時代がある。第二壁面は山口剛、五十嵐力、窪田空穂の国文
 科三教授肖像。卒業論文「伊勢物語論」審査の時、将来を問われて小説家志望と答
 えると、空穂教授は複雑な笑みをもたらしたという。当時の文学部校舎。文科創設の
 親坪内逍遙の胸像。その隣りに乳母車を中にした新進作家時代の家族写真。昭和17
 年「海戦」報道のためガタルカナル沖に向う旗艦「鳥海」甲板に立つ写真。

第一・二壁が囲む中央の平らな覗きケースには小説修業時代の同人誌「街」「新
 正統派」ほかをギッシリ並べた。稲門作家勢揃いの1号雑誌「新風」もある。

展示資料は丹羽家と四日市市立図書館丹羽文雄記念室より借用のものが大半を占
 めた。個人では紅野敏郎、久保田芳太郎、大河内昭爾の諸先生、藤浪敏雄、清水邦
 行氏ほかの方々のお世話になった。深く御礼申し上げる。

1.2.2 戦後 三度の従軍、二度の発禁、栃木県山村の疎開生活を経て終戦後帰
 京、たくましい作家活動がはじまる。風俗小説、実験小説、宗教小説と二転三転の
 時代は第三壁面のパネルと作りつけの大ショーケースに展示。重なる改稿の手が加
 わった「親鸞」の初版、全八巻本の尨大な「蓮如」原稿は中央ショーケースに。第
 四壁面は丹羽氏が授賞した各種賞状を掲げた。天皇陛下から文化勲章授与のカラー
 写真もある。壁面下のケースには四日市名誉市民賞や、敬愛する先輩作家谷崎潤一
 郎・志賀直哉の寄贈本を納めた。入口受付近くの壁面には現在の心境を物語る「春
 来草自生」の直筆色紙。篠山紀信撮影のカラー写真「10余万枚の原稿を書いた手」。
 この手は第三壁面のゴルフスイング姿、女子ゴルファー、ローラ・ポーと握手の写
 真と共に異色。健康保持の生活が、文芸家協会会長や各種文学賞選考委員を兼ねる多
 忙な社会活動と創作活動を支えてきたことを証明している。多産な作品群のほかに
 宗教随筆、旅行随想や、「ゴルフ上達法」など多くの小説以外の著作も展示した。

（付記）本展示の実行委員は、今井半事務長、三浦育子企画広報係主任、吉田八岑、
 宇田川和男、森谷博志、長岡三智子、忠平美幸、高木理久夫と筆者の9名で、ほかに
 館員有志の協力を得た。

2 展示解説 展覧会では説明表示が少なかった。とくに個々の著作について解説
 するところがなかった。解説文を作るための資料を集めたところで、時間切れにな

ってしまったからである。初版本を中心とした約200冊の主要著作には、出版社名、刊行年月、装幀者名を記したカードを付しただけである。3「参考書誌」は準備しながら果せなかった資料を、展覧会後にも読んで、作品解説のための資料として整えた。研究文献調査の手がかりになれば幸いである。

2.1 調査書誌 丹羽文学研究はまだ本格的にとりくまれてはいない。丹羽氏が長らく日本文芸家協会理事長、著作権保護同盟会長のほか芥川賞など多くの文学賞の選考委員をかね文壇の要職にあったことも原因であろう。それになによりも主要著作が長篇大作であって、しかも数多いことが研究を困難にしているようである。著作ならびに参考文献調査のための文献目録も数少ない。著作目録は1.1.2「著作」にあげた小泉譲氏のもの最大で詳しいが昭和50年までである。以後12年の詳しい記録がなく、参考文献リストにも充実したものがない。

2.1.1 解題 個々の作品の解題を丁寧に行っているのは文庫本と現代文学全集類の巻末である。文庫本の調査には「便利な文庫の総目録」「総合文庫目録」を見る。全集類は「最新版全集総合目録」では丹羽氏の場合役立つところ少なく「現代日本文学綜覧シリーズ」がよい。文庫は集英社、新潮社の点数が多く、全集・選集には竹村書房、改造社、東方社、角川書店、集英社、講談社の6種がある。

2.1.2 評論 丹羽文学を対象とした他者による研究文献を網羅的にリスト化したものはない。古いもの、選択的なものでは「現代日本文学全集月報21」筑摩書房（昭29）、「日本現代文学全集87」講談社（昭37）、「国文学解釈と鑑賞」至文堂（昭39.9）、「現代文学大系月報15」筑摩書房（昭39）、「現代日本文学大系月報43」筑摩書房（昭46）には各30点以上あげられている。「丹羽文雄」村松定孝著（昭31）「柘榴の木の下で」福島保夫著（昭60）の巻末リストも有用である。

雑誌論文では「雑誌記事索引人文社会科学編 累積索引版 文学語学編」6冊と「日本文学雑誌文献目録 現代日本文学」3冊からは丹羽研究文献60点がみつかる。「年刊人物情報事典1981—84」「現代日本執筆者大事典」、さらには「日本文物文献目録」平凡社（昭49）、「年刊人物文献目録 日本人編1980—86」では若干の重複文献があるが役立つ。

「大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録人名編」は週刊誌・婦人雑誌の記事が多いので本格的な論文はないが昭和10年から59年までの191点。

このような書誌を手がかりに他者による丹羽論を調査し、そのなかに書かれた作品論を捜す作業をした。最近の書誌はみな標題と執筆者をかかげているが、標題に沿って個々の作品論に行きあたらない。それで3「参考書誌」では標題記載を省略することとし、抄録箇所の頁を示した。

2.2 作品解説 一つの作品論としてまとまったものは少なく、丹羽論としての一部に作品論が顔をのぞかせているタイプが多い。作品の荒筋・梗概を拾うとなると妥当な箇所がない。繰り返しが多く、簡潔で適切な表現となると一層得難い。ただ

ストーリーの部分的な紹介や局所的なエピソードの記録は随所に見つけられるし、印象批評的なものであるが作品評価の本質的、部分的論及は組合わせになって、記事中に発見されることが多かった。

2.2.1 全体 作品の全体についての解説・紹介・梗概・評価・批評といった文章を、①として抄録した。3「参考書誌」を通覧すると、必ずしもそうでないと思われる場合もあろうが、もとの文章から選択するときには、すくなくともその作品全体にかかわる言葉を選んでいる。原文の他の箇所と較べて相対的に全体にわたるものと判定した。繰り返しや、倒置文は文意を正しく伝えるように省略、簡潔化した。旧漢字・旧仮名づかいは現行のものに改めた。これは次の「部分」についても同様である。

2.2.2 部分 作品の部分についての解釈・指摘・事実・モデル考・文体論といった文章を②として抄録した。ここはいずれも短文であるため、全体にかかわる箇所のような省略・簡潔化はしていない。事実関係やモデル考については作品の理解に役立つ範囲にとどめた。文体については全体にわたることであっても、②において。「全体」と「部分」をできるだけセットで選択することを原則にしたが、片方だけの場合もある。①と②が同じ頁のときは、②末尾にだけ頁を記すものがある。

3 参考書誌 丹羽文雄氏の作品は小説だけに限っても数多い。しかし本格的な作家論は他の作家に較べれば数少なく、個々の作品論となると数えるほどである。

作家論・作品論に評伝を加えた主な単行書をあげれば、次のようである。

村松定孝著「丹羽文雄」東京ライフ社（昭31.7）

松本鶴雄著「丹羽文雄の世界」講談社（昭44.4）

中野恵海著「近代文学と宗教——丹羽文雄と親鸞など」桜楓社（昭50.5）

小泉 譲著「評伝丹羽文雄」講談社（昭52.12）

中村八朗著「文壇資料十五日会と「文学者」」講談社（昭56.1）

福島保夫著「柘榴の木の下で——私の中の丹羽文雄」栄光出版社（昭60.11）

これらを参考に2.1「調査書誌」にあげた文献を通覧し、他者執筆の参考文献を調査し、2.2「作品解説」文章から①と②を抄録した。配列は筆者名の50音順。

他者による参考文献は多いが、限定された内容の①と②がある文献は少ない。しかし未発見のものも多いはずであるが、今回は現在調査できた範囲にとどめた。

なおまた、数多い作品、特に短篇の一つ一つの解説に至っては無数であり、本稿に対する与えられたスペースもあるので、対象作品を限定した。それだけでも丹羽氏の文業の主題は、十分に理解されると考えられたからである。

対象作品には、まず受賞作6編「海戦」「蛇と鳩」「顔」「一路」「親鸞」「蓮如」を選んだ。これに文壇的処女作「鮎」、社会的問題作「厭がらせの年齢」「哭壁」、実験小説と呼ばれた「遮断機」、中期代表作「菩提樹」、自伝的問題作「青麦」「有

情」を加え13作品とした。ただし「蓮如」は、論及文献が少ないため付録とした。

「鮎」 昭7.4 「文芸春秋」

「文学界」 第10巻8号

文芸春秋新社 昭31. 8. 1

伊藤 整 ①「鮎」の美しさは文体ではなく、その生きて感じ、見、そして描くという意志の世界の美しさである。二十代でこのような人間の力の総合を実践したことは、全く敬服せざるを得ない。

「新選現代日本文学全集 13」

筑摩書房 昭34. 2. 15

浦松佐美太郎 ①私小説だといってもいい作品である。それにも拘らず、私小説だとは言われなかった。その大きな理由は、作者が母親の生活態度を、合理主義の精神で批判的に見ていたからだと思う (p 431) ②彼の文学は、非合理の耕地の上に育ちながらも、合理主義に根ざしていた。それだからこそ彼は、批難にも攻撃にも甘んじながら、いうところの順応性によって粘り強く、この一筋の道を進んで来られた (p 432)

「現代日本文学館 37」

文芸春秋 昭43. 9. 1

杉森久英 ①普通の親子とちがった、異常に倒錯した親子関係のこまかな陰翳を、若々しく繊細な感覚でとらえたのが、この作品の手柄であろう (p 443)

②この母はまだやっと42歳、息子はその恋人とまちがえられそうな年である。息子は彼女の「女性」としての魅力に気がついており、ひそかにそれを楽しんでいるらしい (p 443)

「丹羽文雄作品集 1」

角川書店 昭32. 6. 15

十返 肇 ①はじめて商業雑誌に書いた作品であり、これを機縁に作家となるべき志をかためて不本意な故郷での生活から脱出、上京した、いわゆる出世作である。②母に対する観方には、「秋」とは違った同情めいたものがある。筆致も確実になっている (p 378)

「現代日本の文学 27」

学習研究社 昭45. 6. 1

野村尚吾 ①幼少の頃、旅役者を追って家出した生母が、変転の生活を送ったはてに、今はある人の世話を受けて暮らしている岐阜に、東京の学校に入学している主人公が、休暇の行き帰りに尋ねる。②主人公は、懐しい母親でありながら、一方では色気のありすぎる女性を、持てあつかいかねるのだ (p 450)

「丹羽文雄の世界」 松本鶴雄著
講談社 昭44. 4. 16

松本鶴雄 ①和緒の愛欲生活の遍歴をくぐって来た後の空虚さと断ちがたい愛憎関係、それはまた家出した母を追い続けてきた丹羽文雄の心象風景といってもいい (p 37) ②この作家は、己れから母を奪った世間と、母の内部の愛欲の所業に対し、小説を通して復讐を続けた (p 38)

「丹羽文雄」 村松定孝著
東京ライフ社 昭31. 7. 28

村松定孝 ①一人の女性の愛欲をその息子が観察した記録風な小説にすぎない。しかし、そこには救われざる人間の喜悲劇がある (p 58) ②愛欲に憑かれた人間のかなしい姿が作中の和緒や守山をとおして、丹羽そのものの有

する諦めの人生観が作中の津田青年をとおして示されている (p 61)

「鮎」 丹羽文雄著
(集英社文庫5-B) 昭53. 1. 30
(丹羽文雄自選短篇集1)

八木 毅 ①まだ学生の方の息子が、42才の母親の、それも囲われ者から本妻になおるかどうかの相談相手にされる (p 322) ②母親は必死にさがしている男から姿を隠し、彼を自殺に追いこむ。彼女は苦悩することのない種類の人間であり、その罪に気づかず、さらに深く罪に落ち込んでゆくタイプの人間である (p 323)

「日本短篇文学全集 42」
筑摩書房 昭44. 2. 5

八木義徳 ②文体とは、作家の現実認識の眼そのものだとすれば、この作者はその作家的出発において早くもこの困難な眼を獲得し、しかもそれを独自の文体としてほとんど完成していた (p 269)

「海 戦」 昭17. 11 「中央公論」

* 昭和18年度 中央公論社文芸賞

「文 芸」 第13巻14号
河出書房 昭31. 9. 1

石原慎太郎 ①冷徹な、客観化された観察者の自分が、同時に海戦現状と言う想像を絶したシチュエーションに引き込まれ溺れることなく、据えた眼をびしりと対象に当てはめられながら、描き且つ描かれている。②艦上生活、一個の人間がその虚構の上で人間的な連帯性をもたぬまま放り出され、やがては負傷によって始めてその社会の内面で連帯を許されると言った一つの不合理な条理が見事に書かれている (p 37)

「丹羽文雄文学全集14 月報23」
講談社 昭51. 3. 8

井上 靖 ①こんどの戦争が生んだ戦争文学の第1級に属する作品。読後感の最大なものは、丹羽氏の非凡な写実力に対する驚歎に他ならない (p 1)

②氏は、顔面両腕に三十余カ所負傷し、右腕上膊部は熱い砲弾の破片を受けとめなければならなかった (p 2)

「昭和文学作家論 下」

小学館 昭18. 6. 25

窪川鶴次郎 ①大東亜戦勃発以来作家たちによって書かれたものの中の最高作品である (p 278) ②あらゆる努力をもって出来るかぎり多くのものを自分の眼で見、どこまでも自分の見たままを書き止めようとする嘆賞すべき必死の努力において、結局は自分というものに促えられていた (p 279)

「評伝丹羽文雄」 小泉 譲著
講談社 昭52. 12. 26

小泉 譲 ①絶対的の革命によって海戦という素材に直面させられ、外的条件の押しつけの中から生みだされた。制約の中に在っても作家的自由精神は全面的に死滅するものではない。丹羽は丹羽なりに戦場においてもそれを生かそうとした (p 203) ②丹羽は終始観戦者の立場に立っていて、弾一つ運ぶのを手伝わなかったことが非難された。丹羽は報道班員として従軍し、はじめから観察者であることを強いられているのだ。「海戦」の映画化をすすめられた熊谷久虎監督は、弾運びもしないような作者の作品の映画化など以ての外だといつて断ったそうである (p 237)

「丹羽文雄作品集 3」

角川書店 昭32. 4. 15

十返 肇 ①読者はここにソロモン海戦を戦った高級海軍軍人たちの緊迫した精神状態を知ることができる。一般社会人と違う死生感や倫理を絶対のものとして確信している職業軍人ばかりのなかであって、作者は自分を異端者と考へざるを得ない。ここから起るコンプレックスが、何回も執拗なほど描かれているのが、この戦争文学の特徴である。②軍隊内であって最も数量が多く、最も危険な場所に置かれている下級の兵が描かれていない (p372)

「現代日本小説大系 59」 河出書房 昭27. 4. 15

中野重治 ①丹羽の場合は、今まで否定してきた戦争を今度は肯定せねばならぬというときの、いわば転向に伴う内面的苦痛というようなものは殆どみられなかった。②「海戦」が海軍大臣賞を受けたという事実と直接して、同時に発表された「報道班員の手記」の方は発禁を受けるというようなことが矛盾なく生じたのである (p323)

「現代日本の文学 27」 学習研究社 昭45. 6. 1

野村尚吾 ①海戦といったダイナミックな現実を、書斎の小説家らしい私小説風な手法で密着させて、逆に海戦の激越さを鮮明に表現している。②旗艦「鳥海」にあった丹羽は、弾丸の破片を受け、顔面その他に三十数カ所も負傷した。ツラギ沖海戦は成功だったとはいえ、すでにその頃は南太平洋の島々を次々に失い、後退をつづけていたわけで、敗色がしだいに濃くなりだしていたのである (p459)

「丹羽文雄の世界」 松本鶴雄著 講談社 昭44. 4. 16
松本鶴雄 ①そこに見られるのは感情

の断面をリリカルに投げ出したような私小説的詠嘆と、自然への親和感なのだ (p118) ②作者の肉体は敵弾で負傷しようとも、作者はこの作品において社会と自我との軋轢に苦しまず、傷つかなかったようだ (p121)

「厭がらせの年齢」 昭22. 2 「改造」

「丹羽文雄自選集」 集英社 昭42. 10. 15

浅見 淵 ①八十六歳の老女が敗戦直後に邪魔者扱いされて姉娘妹娘の嫁ぎ先を転々とする悲劇を、その老醜と共に酷薄に描き出したもの。②敗戦直後の都市山村両方面の陰悪な世相の中に、各人の人情の機微をこまかく穿っている (p395)

「小説の文章」 宇野浩二著 創芸社 昭25. 1. 15

宇野浩二 ①いかにも小説らしいところがあるけれども、ある時の正宗白鳥の小説のような観があり、白鳥ごのみのようなところがある (p198) ②その文章の影響をうけたらしい志賀主義の文章の簡潔とちがって、ゴタゴタしていて、よほど考えながら読まないといわかりにくい (p198)

「尾崎一雄全集 15」 筑摩書房 昭61. 1. 30

尾崎一雄 ①老人問題は、ずっと昔からあった。ただ戦前までは、家族制度による吸収作用でなし崩し的に稀薄化され、戦後ほど確固とした、そして巨大なその姿を現わさなかった (p47) ②戦後の老人問題に、正面から射込んだ第一矢である (p47)

「現代文学大系 46」 筑摩書房 昭39. 9. 10

亀井勝一郎 ①86才のものはや女としてはいのちの終点にきた老婆が主人公である。人間の生命の一種の極限状況である。そしてこの生命は何かと作者は問うている。②丹羽は孤独を感じているに違いない。異形のを生み出した自分の手をみつめているにちがいない (p 489)

「日本芸鑑賞事典 14」

ぎょうせい 昭62. 4. 15

佐藤和子 ①作者の他力本願的な寛容が、すべてをあるがままに受容する。非情に老醜を描きながら、肉親的な情味が漂い、齟齬を通り越して思わず苦笑させられるユーモアとなっている。②終戦直後、国大体が物質不足に喘ぎ、主食はもちろん、衣類も、配給制度で自由に買えなかった時代相を念頭におくべきである (p 26)

「一路」 丹羽文雄著

(講談社文庫に-7-1)

昭46. 7. 1

瀬沼茂樹 ①人間の生命を究極に追いつめて、結局、救われない存在であることにまで徹してゆくということのうちに示される人間喜劇であり、この喜劇はかような徹底によってとりだされた神のヒューモアのようなものにほかならない。②小説の老母は丹羽夫人の祖母にあたるといわれている (p 819)

「丹羽文雄作品集 2」

角川書店 昭32. 3. 15

十返 肇 ①長寿というものは目出たものなどという観念が、いかに現実の前では空しいものか。老醜は誰の上にも訪れる可能性をもっていることを考える時、究極の相に迫ったこの作品に感歎せざるを得ない。②老醜をこ

れほど冷酷無惨に突っばなして書いた作品もないが、同時に日本の貧しさとということも感じさせる (p 462)

「現代日本の文学 27」

学習研究社 昭45. 6. 1

野村尚吾 ①長生きしすぎた老婆が、人間の持つ理性を喪失してしまい、ただ食欲と忘却の中だけに生きている老醜の無惨さを、容赦なく描き切っている。②この老婆の姿はまことに悲惨というほかないのだが、どこか逆にユーモラスにも感じられてくる (p 460)

「芸文時評 上」 平野 謙著

河出書房新社 昭44. 8. 30

平野 謙 ①老母に取材した諸作の基調になっているのは、姨捨山の棄老伝説の現代版といってもいい。②現代版である限り、作者は自己の棄老観念を現代のヒューマニズム思潮と抵触しないよう、細心に案配せずにいられなかった。それが近代人としての作者のまぬがれがたい限界だろう (p 176)

「丹羽文雄」 村松定孝著

東京ライフ社 昭31. 7. 28

村松定孝 ①終戦直後の食料不足の状況の中で、食欲旺盛な八十六歳になる老女が家族からやっかい物あつかいされながら生きのびている。そうした存在をなかばカルカチュアライズして描写したところに本作の意図がある (p 119) ②この小説には発展はない。ただくりかえしうめ女の生態を観察しては救われざる人間世界を象徴するのである (p 36)

「厭がらせの年齢」 丹羽文雄著

(新潮文庫17A) 昭23. 7. 5

古谷綱武 ①この丹羽独自の根強い描写力というものは、先天的に特殊な技能と考えるよりは、描写力が十全に発

揮されうるような形で、人生をとらえているところに、丹羽の目の特色があると考えるべきであろう。②なによりもまっさきに肉体をつかむ、そしてその肉体の現象としての精神を見るのである (p 354)

「丹羽文雄の世界」 松本鶴雄著
講談社 昭44. 4. 16

松本鶴雄 ①うめ女は誰はばかることなく食物を求め、泣き喚き、我執のやり場のない時は、家族の下着を盗み、ズタズタに引き裂くことに熱中する (p 44) ②自然のままにふるまう人間の欲望を、作者は老婆をとおして己れを、そして人間一般を語っているのである (p 46)

「哭壁」昭22. 10~23. 12 「群像」

「現代文学総説 2」
学燈社 昭27. 10. 25

荒 正人 ①対蹠的な性格をもつ特攻隊出身の二人の青年が、戦後の混濁した社会につき放されながら、各々の性格と環境の支配によって人生の道をふみしめて行く (p 320) ②風俗をそのままに外郭から本質を描こうとした結果、意欲は意欲のみに了ってしまったといえるが、やはり代表作品である (p 320)

「文士と文壇」 大久保房男著
講談社 昭45. 5. 16

大久保房男 ②丹羽氏の原因は、その早さの割に加筆訂正の跡があまりない。だが「哭壁」では書き込みが欄外にうねうねと続き、その挿入箇所を示す赤鉛筆の条があちこちに走りまわっている汚い原稿であった (p 24) 題は中近東戦争で報道されたエルサレムのなげ

きの壁のことである (p 22) 一羽共著

「現代作家論」 奥野健男著
近代生活社 昭31. 10. 5

奥野健男 ①宗教によって救われる人間と、本能に負けて転落していく人間を、対象として描くという人生のプリミティブな大問題にぶつかっているところとする厚顔なほどの野心と気力は珍重に価する (p 216) ②彼の常識的なものの見方がこれをみじめな失敗作、少しも面白くないものにしてしまった (p 216)

「中央公論」 第65年 4号
中央公論社 昭25. 4. 1

小田切秀雄 ①絶望とデカダンスに陥る方の青年をめぐって展開するその生母・義父・妹たちの異常に錯雑した愛欲関係を中心に、往年のものが集大成されて存分に開花・豊熟を示している。②野心的風俗作家がその風俗追及の範囲を「絶望」や「宗教的動向」にまで拡張したという趣が濃厚である (p 238)

「現代日本文学全集 47」
筑摩書房 昭29. 11. 20

亀井勝一郎 ①私が「哭壁」に大へん心ひかれるのは、無数の思想をもてあました人の苦悩が、がむしゃらに表現されているからであり、「どうにもならぬもの」を、どうにかしようという焦慮に、誠実をみるからである。②丹羽という人は、身にあまる思想を生得的に負っている人だ (p 410)

「丹羽文雄文学全集15 月報15」
講談社 昭50. 7. 8

窪田稲雄 ①アラブとイスラエルの戦争は、いわば聖地の奪回ということでしょう。希い事や、悲しみに立ち致ると、聖地の土壁にぬかずいて、ひたす

らに祈る。「哭壁」は作者の執念と希求が満ちあふれ、美事な展開を示している。②先生も一生懸命、今でいう全力投球でした。しかし原稿となるとこのときばかりは、書き損じ、書きこみで、読み解くには、なかなか往生したものです (p5)

「一路」 丹羽文雄著
(講談社文庫に-7-1)

昭46. 7. 1

瀬沼茂樹 ①二人の特攻隊員であった青年の生活と反省とを通じて、その把握と解釈とをこころみた。当時の「唯物論と実存主義との対決」といわれた課題についての彼なりの解答。②ここでとりあげた一種の観念的方法を応用して、新たな自己脱皮へのまじめな努力がつけられる (p820)

「丹羽文雄作品集 3」

角川書店 昭32. 4. 15

十返 肇 ①二人の復員者が自己の住む世界を変化させようとした努力の実体を、作者は自己の内面から抽象して描いたのであって、その意味から一個の観念小説といえる (p268) ②自分の思想を表現するのに、具体的描写をこれほど犠牲にした小説は、これをもって最初とする (p370)

「文壇資料十五日会と「文学者」

中村八朗著
講談社 昭56. 1. 25

中村八朗 ①旅館を経営する主人公のエゴとキリストにひかれる復員青年の奉仕的無私の愛の姿がからみあって、人間の哀しみが重厚に描かれる。②エゴと愛のからみあいのテーマであった。戦後の廃退したすさまじい生活の中で、そのテーマが人間の営みの中にのたうちまわるのだ (p49)

「風俗小説論」 中村光夫著
河出書房 昭25. 6. 25

中村光夫 ①人間の存在のもっとも切実なテーマを扱ふとき、その練達の技法と似ても似つかぬ思想の未熟を曝けだしてしまふ (p216) ②彼の「特色であった風俗的な描写」も、激しい世相の推移によって書かれた当時の生彩は失はれ「古びて」しまっている (p218)

「丹羽文雄」 村松定孝著
東京ライフ社 昭31. 7. 28

村松定孝 ①小説的起伏もなければ、脈絡もなく、事件らしい事件も起らないのだ。終戦のもたらした戦後の国民の虚脱状態そのものがテーマなのかも知れない (p143) ②作中人物への肉迫が、恰も強度なレンズを通して微生物を見たときのような、異常なおどろきを読者にもたらす (p146)

「近代文学」 第6巻5号
近代文学社 昭26. 8. 1

湯地朝雄 ①丹羽が、そのような事件や人間をとりあげ、それらに関心を示し、それらについて考え始めている限り、丹羽を軽蔑することに反対する。②けれども、作品の各部分もその構成も、ともに典型的な抽象性におわれていることについて、丹羽の思想を責めねばならぬ (p136)

「蛇と鳩」昭27. 4~27. 11「週刊朝日」
* 昭和28年度 野間文芸賞

「新選現代日本文学全集 13」
筑摩書房 昭34. 2. 15

浅見 淵 ①鉄鋼会社の重役が、宗教はくだらない観念の遊びだといって軽蔑しながら、新興宗教を、素晴らしい

企業だとし、密輸でもうけた莫大な資金をつぎ込む。巧みにデッチあげた機構と運営の力と、今日的な教義や巧妙な宣伝方法などがものをいって、それはまんまと一応の成功を遂げるに到る。②作品の布置や構成がよく考えられて緊密に組合わせられ、しかも、細部描写が隅々まで行届き、作者の長篇では最も構成的完璧さを示している (p 436)

「蛇と鳩」 丹羽文雄著
(新潮文庫 草17H) 昭35. 9. 15

亀井勝一郎 ①新興宗教という特殊な世界だが、かえって人間の本性が強調され、あくどさや奇怪さが浮彫りされている。②丹羽氏は書くことによって、疑似宗教と、真の宗教との差を、はっきり自覚せざるをえなかったにちがいない (p 402)

「日本文学全集 63」
集英社 昭47. 7. 8

竹西寛子 ①新興宗教の繁栄という、敗戦後の世相の一端を象徴する特殊現象を媒介として、人間の心の世界における普遍的な問題を深めようとした (p 415) ②たとえ怪しい宗教であっても、もし救われた人間がいたとすればそれはそれでよい (p 415)

「丹羽文雄作品集 5」
角川書店 昭32. 1. 15

十返 肇 ①テーマは、新興宗教の社会的あり方への疑問であり、ここでは宗教は思想的な問題としてよりも社会的な問題として扱われている。②この作品は浄土真宗という宗教的立場から、新興宗教を批判したものではない。宗教を一つの社会現象として客観し、合理的な立場から批判したものである (p 454)

「昭和国民文学全集 26」
筑摩書房 昭49. 4. 25

野村尚吾 ①紫雲現世会は、いわば宗教心のない人間によって、たんなる事業として出発した根本的な矛盾が、会の発展にともなって拡大され、破局へと向かわねばならぬ喜劇であり、悲劇でもある。②内幕を暴露したり、インチキ性を告発した小説にありがちの嫌味が、まったくといていいほど感じられない。そこがこの長篇の成功した所以である (p 456)

「丹羽文雄」 村松定孝著
東京ライフ社 昭31. 7. 28

村松定孝 ①戦後社会風俗小説としても称すべきもので、その意図は、新興宗教への丹羽の冷笑と非難である。②古久根の魔手から逃れようとする千恵という乙女と、やはり古久根の助手だった緒方とが新興宗教に愛想をつかして、そこから脱け出すことによって、新しい未来にむすばれ合おうとするところで終わっている (p 224)

「遮断機」 昭27. 11 「新潮」

「現代日本文学全集 47」
筑摩書房 昭29. 11. 20

浦松佐美太郎 ①主人公の自己反省によって、罪の自覚の過程が描かれているのであるが、非合理の追究という形にもなっている。作者の合理主義精神は、非合理すら追求せずにはいられないのであろう。②仁子が、作者の合理主義精神による批判をまぬかれ、男性からの愛慾の位置を測られることなく、非合理のままに放置されているが、印象としては実に鮮かである (p 420)

「現代作家論」 奥野健男著

近代生活社 昭31. 10. 5

奥野健男 ①薄弱的な常識的な自己の立場を、疑い、ひっくり返し、その自我の本質を追究しようとしている。その方法はまったく幼稚だが、この下手な自己追究の部分が心を打つ (p 217)

②悲壮なものを感じずにはいられない。しかし丹羽は今の流行を敏感に感じ、ちょっとそのようなふりを、擬態を示しただけかも知れない (p 218)

「遮断機」 丹羽文雄著
東西文明社 昭28. 7. 15

亀井勝一郎 ①ここに宗教問題などあらはれていない。しかし救済観念の崩壊してゆくすがたが自覚的に描かれている。あらゆる自己弁明がそのまま深い感はじであることへの嘆きがある (p 39)

②単行本にするに際して、徹底的に推敲した。丹羽の文体は元来柔軟体ともいべき種類のもので、受身のかたちでぬらぬらと相手にからみつく文体である。しかし小説として文体の立体性をはっきり確立する必要がある。多くの削除はこの意味でかなり成功したようである (p 240)

「文芸」 第2巻11号
河出書房新社 昭38. 11. 1

日沼倫太郎 ①二十数年まえの原体験がもつ宿命的な暗さに、突如として目覚まされた作者が、これまで自分の文学を育てあげ、その作品の無意識の地下をなしていたものに自覚的に接しようとした出色の作品。②全体に底流する熱っぽい自己告白の衝動の必然性は理解できない (p 203)

「文芸時評 上」 平野 謙著
河出書房新社 昭44. 8. 30

平野 謙 ①在来の制作方法、人間認識にあきたらず、そこから飛躍しよう

として、前進を試みてはいるが、作者の強靱な膂力をもってすら、その努力は正当に報いられていない。②新しい人間認識の発芽する内的必然性に乏しく、無慙な失敗に終わっている (p 76)

「丹羽文雄」 村松定孝著
東京ライブ社 昭31. 7. 28

村松定孝 ①罪の意識の自覚によって人間を追求する以外には、もはや小説を書く意味が存在しないとする主張をあからさまに示した作品である。②これは丹羽の仏教的原罪思想にもとづくものなのだが、それが余りに色濃く主張されすぎて、読者の小説から受ける印象をまとも悪いものにしてしまった欠点も、たしかにあるようだ (p 202)

「文芸時評」 山本健吉著
河出書房新社 昭44. 6. 30

山本健吉 ①書出しから展開への巧みさは、やはりこの作者独自のものだと思った。②こんなに主題のはっきりしない小説も珍しい。作者の思いすごし、「実験」的な意欲が、このような迷路へ落ち込ませたのかも知れぬが、わけの分らない小説は、分らないという外はない (p 55)

「青 麦」 昭28. 12 文芸春秋新社刊

「新選現代日本文学全集 13」
筑摩書房 昭34. 2. 15

浅見 淵 ①父親の人一倍煩悩にまみれ不倫に充ちた愛欲地獄図絵を、残酷なまでに突っ放して描き、作品の底において父親に融和の手を延ばすことができるようになった。②作中のいかなる人物も救ってはならぬという「無救の思想」は、罪を意識することは取

りも直さず入信であるという、親鸞の思想に通じる (p 437)

「文芸」 第13巻14号

河出書房 昭31. 9. 1

石原慎太郎 ①無救済の内に我々人間はそれを直視することによって尚生きなくてはならない。無限地獄的な人間の実在のかかる状態を、人間は救いを希みながらその虚妄さの故に救済を拒否し、そうした救いの上に更にその虚無の悟りにも絶望して生きなくてはならぬと氏は言うのだ (p 38)

「文学界」 第8巻8号

文芸春秋新社 昭29. 8. 1

小池徹郎 ①丹羽の場合、宗派への叛逆行為が、そのまま血縁への離反と同一の事件だった。寺をあさましいと思う感情が痛烈であればあるだけ、彼の意識に上ってくるのは宗派への不信ではなく、父の煩惱の姿とか、血統のけがれに対する嫌悪や悲しみなのです (p 152) ②彼の重視するのは、非情の観察と、初心を忘れぬ新鮮な直観であり、生きることの不確かさの苦しみと、その迷いを紙の上に定着させる技術なのです (p 158)

「丹羽文雄作品集 5」

角川書店 昭32. 1. 15

十返 肇 ①父と子の関係が、ここでは世代的な対立や、思想的対立によって規定されようとはしていない。むしろ両者の生き方からまる宿命の深さがえぐられている。②浄土真宗的な生き方とは、救われざる人間の、救われざる限界を試そうとする生き方であるかもしれないのだ (p 458)

「近代文学と宗教」 中野恵海著

桜楓社 昭47. 12. 10

中野恵海 ①如哉の極彩色なまでの煩

悩の姿の上にこの凝視 (大慈の常照) をもって来た事一つで「青麦」は近代文芸の一異色たるを失わない (p 45)

②如哉の生活に、もっと女犯に狂奔し、永遠の凝視に戦慄するものあってよいのと同じく、賛仰の心や、歓喜の生活内容もあって至当である (p 47)

「現代日本の文学 27」

学習研究社 昭45. 6. 1

野村尚吾 ①丹羽にとっては、父は僧職にあるという点が問題なのだ。小説家たろうとしたとき“父”とその“僧”に背く必要があった。②父親を憎み嫌う感情の中には、父が祖母と通じ、母を迫出す結果になった、言いかえれば、母の運命を狂わした男への、もう一つの憎しみがあった (p 468)

「丹羽文雄の世界」 松本鶴雄著

講談社 昭44. 4. 16

松本鶴雄 ①義母と関係を持った住職である父に、息子は反抗し、文学の世界へ逃亡する。時代が変わり、父は他界し、久しぶりに息子は故郷へ帰る (p 155) ②父が屋根から転落し、骨折し、それを治療する際の、呻き声に対する、作者の執拗な描写は、この作品の主題にかかわっているだけに凄絶である (p 156)

「文学界」 第8巻2号

文芸春秋新社 昭29. 2. 1

山本健吉 ①この作品で、氏は如哉を、かつて生母を描いたように、客観的な観察者として眺めてはいないのである。もっと我が身に即した、内面の問題として、如哉を捉えようとする (p 167) ②如哉の醜悪を描きながら、そこには恐怖にまで至るような魂のおののきが見られない。「人間存在としての醜悪」にまで深まっていない。これはたいへ

んなことだと思うが、やはりこの作者であるがゆえに要求したいことである (p 168)

「菩提樹」昭30. 1. 1~31. 3. 30

「週刊読売」

「丹羽文雄文学全集11 月報20」

講談社 昭50. 12. 8

上田三四二 ②母が子を置いて家を出たいという事実、それにもかかわらず母子のあいだに信愛の情が断たれなかった。母との空間的距離、その母が人生の裏街道を生きねばならなかったことからくる心理上の距離が、氏の母を親る眼を厳しいものにして (p 4)

「現代日本文学大系 46」

筑摩書房 昭39. 9. 10

亀井勝一郎 ②生ま生ましい愛欲の描写があつて、はじめて罪という問題が生彩を放っている。信仰への開眼なしに罪の問題は起りえない。罪悪感とは、人間の反省といったものではなく、仏によって与えられたもの、信仰によって自覚せしめられたものである (p 493)

「日本文芸鑑賞事典 16」

ぎょうせい 昭62. 5. 15

佐藤和子 ①親鸞を開祖とする浄土真宗の精神世界を基盤に、人間の愛欲と「罪の意識」が、文学的テーマとして追求されている (p 267) ②朝子が相手の強引さに負けて、もとの関係に戻り、仏に救いを求めて仏応寺の本堂にまいる場面は、G・グリーン「情事の終り」の、また宗珠が檀徒の前で罪を告白する最後の場面は、N・ホーソンの「緋文字」の場面を思わせ (p 268)

「現代日本文学館 37」

文芸春秋 昭43. 9. 1

杉森久英 ①寺の経済的基礎、本山との関係、檀徒との関係、報恩講や月参りなどの行事、そのようなもの、こまごました描写と説明の上に、養母との不倫の関係をむすんだ僧侶の内面的苦悩が綴られる。②氏が長く無思想とか無批判とかいわれていたのは、本当に思想がなかったのではなく、思想について語ることを好まなかったからであろう (p 442)

「一路」 丹羽文雄著

(講談社文庫に-7-1)

昭46. 7. 1

瀬沼茂樹 ①実父をモデルにとりあずると共に、その母に去られた悲しみに、自己の幼時の悲しみを移入し、実父と共に自己の分身として、作者自身の思想や心境を表明するにあつた。②唯物思想にこりかたまつた館要助を登場させて、親鸞の思想と対決させ、「浄土思想の教義の合理性」をあかし、その現代的意義をとりだしている (p 822)

「丹羽文雄作品集 6」

角川書店 昭31. 12. 20

十返 肇 ①住職として朝夕仏に仕える身で、義母との醜関係をたちきれず、また他人の妾と通ずるといふ、醜い行為や精神を檀徒一同の面前で告白する勇気をもち得たのは、彼が仏教を強く信じていたからである (p 389) ②彼の告白は館要助との対話によって無意識に勇気づけられ、みね代の無知によって意識的に促進されたものである (p 392)

「近代文学と宗教」 中野恵海著

桜楓社 昭47. 12. 10

中野恵海 ①朝子と宗珠の生き方が最大のテーマとして扱われており、宗珠の「新生」が一篇の眼目となっている(p 55) ②宗珠の最後の「炎の告白」、この感動的な言葉がどれ程読者の胸にひびくかという事になると、私は甚だ懐疑的である(p 57)

「現代日本の文学 27」

学習研究社 昭45. 6. 1

野村尚吾 ①「菩提樹」が前作「青麦」と異なるのは、父親の内部にはいり、その苦悩を自分の問題として書いている点である。②父親に対する反撥の深さは、相似の深さであり、反撥はまた自己嫌悪の強さを物語っている。私には、父親の与えたものが、母親に劣らぬ重要性があり、場合によっては、より大きかったといえなくはない気がしてくる(p 476)

「丹羽文雄の世界」 松本鶴雄著
講談社 昭44. 4. 16

松本鶴雄 ①作者は宗珠を通して「人間は罪を犯さずには生きられないものだ」、それゆえに他力によってかえって救われるという親鸞の思想を見事に血肉化している(p 177) ②宗珠は常識も分別も人一倍あるために、ますます偽善をくりかえしていきが、最後に反省する。「私の闘う相手は、私自身の内にある弱い心でした」(p 50)

「わたしの日本文学」村上兵衛編
鷹書房 昭52. 7. 20

ヴァーレイ、ヘンリー ①中心人物は何であるよりもまず一人の男であって、われわれは、彼の頼りなさに対し同情をおぼえ、彼のヘマさ加減と、最後の告白も理解できる(p 222) ②この小説は日本人の透視画の見方を要求している。ヨーロッパ風の、遠近法による

見方は、役に立たない(p 223)

「国文学 解釈と教材の研究」

第13巻 3号 学燈社 昭43. 2. 1

ストロング、ケネス【武田勝彦紹介】

①現代における批評精神と何世紀にもわたって仏教によって育かれたまじめな、しかし憐れみのある人生観の二つが巧みに融合されたものである(p 134) ②フィナーレの告白後の生活、告白に対する壇家たちの反応などが描かれていない。個人の苦悩なり体験が、個人の中に埋没してしまうだけで、社会的に醗酵していないところがある(p 133)

「国文学 解釈と教材の研究」

第13巻 3号 学燈社 昭43. 2. 1

村松定孝【K・ストロングへ】

①人間が煩惱のあがきから逃れえない運命を共に泣いてくれる仏の慈悲心を、己の上にくころみる決心が付き、丹羽も宗門の血族として、衆生を得度する心境にいたりえて本作を成したものと私は信じている。②宗珠の孤独を救う友情が記されていないという批判については、人間同士の力では、とうてい現世の煩惱具足からわれわれの逃れえないことを強調したかったからこそ、なまじいの解決を故意にさけたもの、と私は考えている(p 137)

「日本の文学 55」

「顔」昭34. 1. 1~35. 2. 23「毎日新聞」

* 昭和36年度 毎日芸術賞

「日本の文学 55」

中央公論社 昭40. 12. 5

浅見 淵 ①一人の女性を父と子で争い、二人して犯しかねない不倫な危機を孕みながら、血の中に流れている、無意識的な人間としての倫理的潔癖感

が、本能的にその危機を回避する。

②丹羽の強靱でフレキシビリティに富んだ心理追求で、よく生動感を伴って写し出している (p 537)

「昭和文学全集 14」

角川書店

昭37. 6. 5

十返 肇 ①愛欲の場に罪悪意識をからませて描く作家は意外に少ない。作者の意図は、愛欲情痴の恋愛をくぐりぬけて生を新たにしてくる女の過程的な姿を描くことにあった (p 435) ②父を仏教学者にしたてて、罪の意識のない人間にした設定は、宗教と人間の関係が、一般的な通念では把握できないことをいいたかったに違いない (p 435)

「近代文学と宗教」 中野恵海著

桜楓社

昭47. 12. 10

中野恵海 ①此の小説に於て毀誉褒貶の激しい二つの問題点がある。その一つは、衿子と清州の結婚であり、もう一つは耕が最後に衿子を拒否することである (p 73) ②何と丹羽はわれわれにものを考えさせる事か。人間が途方に暮れる様な問題を、これ等の作品はわれわれに突き出す (p 77)

「丹羽文雄の世界」 松本鶴雄著

講談社

昭44. 4. 16

松本鶴雄 ①清州は他界する。衿子は二十代で未亡人になる。耕との間に昔から断えることなく続いていた感情の伏線が、一挙に具体的な身証を求めたがる。その状況から耕は、逃げ出す (p 211) ②衿子への愛情をも粉々に砕いてしまわねばならぬほどの苛烈な行動によってしか、過去の自分と訣別でき得ないほど、本来の自己から耕は遠い地点で生きていたということになる (p 212)

「有情」 昭37. 1 「新潮」

「文学界」

第16巻12号

文芸春秋新社

昭37. 12. 1

佐伯彰一 ①作家たる「私」のことでなくて、ごく市井の母親か父親の話だったら、じつに正直でうまい小説である。②市民小説を書くべき人が、非市民的な小説を書いてきたことに、日本的な歪みがあったと思う (p 236)

「昭和文学全集 14」

角川書店

昭37. 6. 5

十返 肇 ①アメリカへ留学している息子が、ドイツ人の娘と恋愛し結婚したいといってくる。実際に作者の家庭におこった事件を描き、文学以外の問題としても反響をよんだ (p 438) ②家族制度が形式としては崩壊しつつありながら、私たちの血の中に執拗に残存しているのを痛感せずにはいられない (p 439)

「近代文学と宗教」 中野恵海著

桜楓社

昭47. 12. 10

中野恵海 ①息子の直に、短刀でもつきつけられたようになって、己れをさらけ出したところにこの作品の大きな意義があろう。②「有情」で述べられる丹羽の心が既に八年も前の小説「青麦」に見事に肉付けをされ所謂文学的真実として生かされていたという事に私の注意は寄る。そして思想の円熟という事も容易なことではないと、今更のように私は思う (p 83)

「私の文壇風月」 中山義秀著

講談社

昭41. 2. 25

中山義秀 ①「有情」のように赤裸々な心情を吐露する真率な作品を見出すことは、喜びであり心の支えにもなる (p 91) ②主人公が紋多であろう

と私であろうと、一人称と三人称の違いだけのことだ。問題に肉薄する作者の態度が、三人称の間接性をまどろしこいものにさせたのであろう。それだけ真剣であり、したがってこの作者を成長させたゆえんにもなる (p 87)

「現代日本の文学 27」

学習研究社 昭45. 6. 1

野村尚吾 ①アメリカに留学していた長男が、ドイツ系アメリカ娘と婚約し、だしぬけに事後報告と承認を得るための手紙を寄こしたのに対し、父親である主人公が激怒し、妻もまた心配のあまり半病人になる。②息子の反駁の手紙から、主人公は“父親の立場”を回顧することで、自己反省が激情を消してしまうばかりか、怒りに寝せた妻を宥める側にまわるいきさつが、振幅の激しい筆致で書かれている (p 477)

「丹羽文雄の世界」 松本鶴雄著
講談社 昭44. 4. 16

松本鶴雄 ①この主人公は、息子がアメリカ留学中、ドイツ娘と結婚したいと言いつつ出したのに狼狽、激怒し、三十年前の父や檀徒を裏切った「家出」のことを心中深く噛みしめる。②珍らしくナマのままの文章で作者に密着した心境小説なのである (p 35)

「一路」昭37.10~41.6 「群像」

* 昭和41年度 読売文学賞

「文壇紳士録」 巖谷大四著
文芸春秋 昭44. 10. 30

巖谷大四 ①「加那子は私である」ということは、氏の「文学的執念」の前進を示すものである。②親鸞の教えと、人間の「業」との対決をこころみ、「私」を「加那子」に託して究明した

わけだが、ここでも、氏は、解決を見出すことができなかった。「さらに書かねばならない」ことになるのである (p 175)

「小説家の中の宗教」大河内昭爾編
桜楓社 昭50. 10. 20

大河内昭爾 ①父を描くことで浄土真宗の世界へあらためて足をふみこんだ作者が、今度は自分を祖上にのせることでこの思想の極限に身をまかせたのである (p 330) ②有無をいわさぬ感動ともいうべき切実なる感情そのものである。そしてこの作品をとおしてうける人生への怖れである。加那子の恐怖は丹羽文雄その人のものだ (p 331)

「一路」 丹羽文雄著
(講談社文庫に-7-1)

昭46. 7. 1
瀬沼茂樹 ①ここで注意すべきことは、坊守という蔭の存在を主人公に選んだことである。仏教的世界観では従層的意義しかもたぬといってよい女性を主人公として、自己の宗教意識の検証をこころみている。②親鸞の他力本願の思想を、本来的に受動的な女性の立場に身をおいて、徹底的にこころみるという意図をあらわしている (p 824)

「日本文学全集 63」 丹羽文雄
集英社 昭47. 7. 8

竹西寛子 ①作者と親鸞の教義との、はじめての文学的対決によって生まれた力作であることを疑わない (p 417) ②愛欲の世界を冷く描く作者の筆は恐ろしいまでの冴えをみせる。たたみこむような呼吸、対象に執拗に、持続的にくい下る姿勢、紙面から異様な気配がたちのぼってくる (p 418)

「近代文学と宗教」 中野恵海著
桜楓社 昭47. 12. 10

中野恵海 ①加那子はわが手で娘を殺し、永遠に息子を失うことになって初めて罪の恐ろしさに呻吟する。波瀾万丈の因果物語で、純文芸のものとしては珍しい (p 88) ②「一路」とは女人のたどる苦悩の一筋道であり、その苦悩の末に見出される女人成仏への道にほかならない (p 96)

「丹羽文雄の世界」 松本鶴雄著
講談社 昭44. 4. 16

松本鶴雄 ①「救い」への凄絶なもたえは、ますます深まり、加那子に至っては地獄絵図さながらだ (p 190) ②好道も加那子を「救いたい」と思っても「救えない」。苦悩の淵にいる人間が、どうして救いえよう。これが「文学」の、つまり「生」の限界なのだ (p 189)

「親鸞」昭40. 9. 14~44. 3. 31

「サンケイ新聞」

* 昭和44年度 仏教伝道文化賞

「俗聖の文学」 池田 岬著
講談社 昭50. 7. 20

池田 岬 ①親鸞の重い一生と共に、明遍、空也、一遍から西行、良寛にいたるさまざまな俗聖たちの系譜とその生ぎまを随所に散りばめ、双の手に抱きかかえるようにして同時に描き出している (p 309) ②作者がのめりこんだのは親鸞を通した無慙無愧の人間仏教であって、金襴の袈裟に包まれた既成仏教ではない。むしろその権威をひっ剝すことから始めている (p 309)

「丹羽文雄文学全集 5 月報 7」
講談社 昭59. 11. 8

今里広記 ①その味わい深い宗教観、哲学観をもとに親鸞や法然について独

自の観察をして、これら宗教家がたどった道程を私どもによくわからせてくれる (p 3)

「親鸞 4」 丹羽文雄著
(新潮文庫に-1-17) 昭56. 10. 25

大河内昭爾 ①作者は、これでもか、これでもかと、他力のなかの自力というくだりを果てなく追いつづけて、親鸞のわが身をなげうつような切実な悩みを、自らの煩惱とむきあいながら現代人の妄執の側から語ってやまない (p 497) ②善鸞は親鸞の教えに背く運命に翻弄された。善鸞の悲劇を誘発する微妙、精細ないきさつが、この小説固有の迫力をもって描き出されている (p 498)

「日本文芸鑑賞事典 19」

ぎょうせい 昭62. 2. 15

佐藤和子 ①道元、日蓮など数多くの仏教者の動きが濃い密度で描かれて、随所で親鸞の生き方と比較される。

②悪人正機思想は「神が恩寵を示すには、罪が犯されることを前提としている」キリスト教新教の教義にも共通している (p 208)

「丹羽文雄文学全集 7 月報 18」

講談社 昭50. 10. 8

重松明久 ①宗教的生の実在を信ずるため、ぬきさしならぬ絶対否定の対極に、一抹の光明が見出される。②真宗史家一般の女犯夢告肯定的見解にもかかわらず、丹羽氏は、恐らく高田派に伝存する偽作文書とすべきとの立場を貫ぬいておられる。親鸞の人間像から考え、女犯夢告にわれの心理の世界での真实性は、よみとれないと考えたからであろう (p 5)

[付] _____

「蓮如」昭46.1～56.6「中央公論」

* 昭和58年度 野間文芸賞

「昭和作家論集成」 磯田光一著
新潮社 昭60. 6. 1

磯田光一 ①本願寺の勢力拡大をめざしたかと思える蓮如を、求道者親鸞に對する伝道者蓮如としてとらえ、自分

の役割を布教と啓蒙とに限定してその役割に耐えつづけた。社会的役割と内心とのギャップが、この小説の中心テーマであり、おそらくこの蓮如像は作者自身の思いにいろいろられている (p 179) ②資料のあつかに慎重を期したためか、叙述がところどころ説明的になりすぎている部分もある (p 179)

あとがき 今春、図書館が開催した「丹羽文雄展」に関連して、展示の概要と作品解説のため調査した参考文献を、ここにまとめた。

丹羽氏自身による作品論や解説も多いが、今回は他者による論及の範囲にとどめ、対象も12作品に限った。参考文献は論者名の五十音順配列としたが、丹羽文学と論者のそれぞれの関わりを考えれば、年齢順配列としても、また意味があったかと思われる。

参考文献の内容抄録は、そのまま作品の解説ともなりうるが、さらに詳しく論及している本文への、索引の役目を果している、受取ってもらえれば幸いである。

(ふかい ひとし 図書館特別資料室)